
コロナ禍における地域保健看護実習Ⅱでの遠隔実習、学内・ハイブリッド
実習の取り組み

知念真樹（地域保健看護実習Ⅱ）

教育上の課題と工夫

2020年度の地域保健看護実習Ⅱは、遠隔実習と学内・ハイブリッド実習の組み合わせで実施された。地域保健看護実習Ⅱは、1クール3週間の3クール実施される。同年度は、Aクールは遠隔実習、B・Cクールは学内・ハイブリッド実習となった。ここでは、実習目標のうち特に学んでほしい「地域、個人・家族の健康課題を明らかにし、公衆衛生看護活動と関連づけて説明できる。」「地域、個人・家族の健康問題の解決や健康増進に向けた公衆衛生看護活動を実施できる。」の2つの目標に対し、学生が、可能な限り通常の実習と近い体験と実施ができるよう、工夫したことについて取り上げる。

実習のスケジュールは、学生全員が体験できるように、在宅での自己学習の時間も勘案しながら教員が組み立てた。また、市町村の了解がいただける場合は、市町村オリエンテーションや健康教育は、Zoomで市町村と繋ぎ実施し、可能な限り、学生が、市町村の保健師から情報やアドバイスがもらえるよう配慮した。

家庭訪問は、母子、成人、高齢者、障害者で各3事例ずつ準備をし、同じ市町村の学生で事例が重ならないよう配慮して2回実施した。実施の場も、実際の自宅へ訪問している気分が味わえるよう、地域・老年の実習室と1Fの男子職員の休憩室を利用し、できるだけ事例の家の状況に似せるよう小道具を設置し実施した。訪問1回目と2回目の間に、事例検討会を持ち、アドバイスを2回目の訪問に生かせるようにした。また、事例検討会のメンバーとなっている学生の家庭訪問にその他のメンバーをZoomでオブザーバー参加させることで、学びの幅を広げるよう工夫した。健康相談では、母子保健手帳交付時の面接、特定保健指導、高齢者の基本チェックリストの面接を実施した。母子保健手帳と基本チェックリストについては、事前に事例を伝えず実施することで、現場の保健師の対応と近い体験ができるようにした。また、特定保健指導は事前に事例を伝えて実施したが、Zoomでの実施であるため、学生が手元に台本を準備して実施している様子が見えなかった。健康教育は、現場の保健師に直接、もしくは録画を見てもらいコメントをもらうようにした。一部の学生は、Zoomを通して直接地域住民へ健康教育を実施することができた。地域組織と保健師との連携では、難病相談支援センター「アンビシャス」、と相談支援事業所「ウェーブ」の方にZoomで1時間ずつ講話していただき、学生の学びが深まるようにした。

遠隔実習、学内・ハイブリッド実習の利点は、実施場面の共有の容易さ、実際の実習では担当できない事例の体験、学生達の課題（コミュニケーションの課題と看護技術の未熟さ）に教員が気づけたことである。

With コロナに向けて

COVID-19の蔓延下での実習は、教員にとっても示唆に富んだものだった。制限された中でも内容を工夫することで、学生の学びがある程度は確保されること報告されている（宮里ら、2020）。また、学生の技術的に未熟な部分が確認でき、次年度の演習で強化すべきことが明らかになった。COVID-19の蔓延で普及したZoomは、Afterコロナでも離島と本島の市町村を繋いで事例検討会を行うなど、学生の学びを広げるために活用していきたい。

引用文献：宮里澄子, 牧内忍, 知念真樹, 長濱直樹. (2020). 第52回沖縄県公衆衛生学会抄録集. <https://koeikyo.com/opho-abstracts/#i-2>